

【聖書】

使徒言行録 1:3 イエスは苦難を受けたのち、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話されました。4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。5 ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼(バプテスマ)を受けられるからである。」

6 さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。7 イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

1 歴史に学ぶ

新型コロナの。株が猛威を奮っていますが、そろそろ、日本でコロナ禍が始まって二年になります。伝染病が蔓延する社会が当たり前となり、今までのやり方が通用しなくなったことを痛感する二年でした。マスクをしていない顔に違和感を覚え、外出も減り、教会の集会も難しくなりました。しかし、通用しなくなったのは、そのような表面的なものばかりではない、とも思います。もっと根本的なもの、ここ何十年も私達を捕らえて来た「豊かな事、強い事、大きい事はよいことだ」という価値観、生き方、社会の在り方そのものが通用しなくなった、「私達は変らねばならない」と感じている人は多いのではないのでしょうか。しかし、どのように変わっていけばいいのか？時代の曲がり角、いえ、どん詰まりにいることは実感しても、どちらに進めばよいか分からず、立ち尽くし途方に暮れるばかり。

こういう時こそ、過去の歴史に学ぶべきだと思います。神の民の歴史が描かれた聖書や自分達の教会の伝統・歴史に聞いていく必要があります。聖書や教会の伝統、歴史から学びながら、自分達のこれからの在り方を求めていく時、とても重要なことがあります。私の尊敬する牧師が説教でよく語ることですが、「物事は、表面的なところだけを見ても理解する事はできない。奥に隠されている本質的なものを理解する必要がある。」という事です。

「本質的なもの」を信仰的な言葉で言えば、目に見える表面的なものの奥に隠されている「神の御心」「神の真理」と言えるものだと思います。時代や状況が変わっても、変わらない

もの、ともいえるでしょう。

使徒言行録は、使徒達が、聖霊なる御神の力のうちにイエス・キリストを宣べ伝えていくことで、本質的な神の真理を学んでいく様子を描いた物語とも言えます。だからでしょうか、ルカは、新しい使徒達の物語を始めるにあたって、旧約の長い歴史を、主イエスと使徒達たちの姿に映し出し、古いものと新しいものを描きます。そうして、古い神の民の歴史が指し示している新しい将来への展望で物語を始めているのです。映画で言えば、前編の要約をしながら、これからの展開を予告する導入部分といえます。今日は、古い神の民の歴史にどのような真理があり、それはどのような新しい将来を指さすのか、という視点から、使徒言行録第一章の場面を見て行きたいと思います。

2 新しい四十日

復活の主イエスは、地上での最後の四十日を、使徒達に、神の国について話されることに用いられました。この四十日間は、出エジプト記20章や24章に描かれている神とモーセのシナイ山頂上での四十日間になぞらえている、という解釈があります。「なるほどなあ」と思います。奴隷として迫害されていたイスラエルの人々の叫び声を聴いた神は、天を傾けて下り、モーセに現れ、彼をイスラエルの指導者として遣わし、エジプト帝国から脱出させます。そして、人々はシナイ山まで導かれるのですが、そこで神はシナイ山の山頂にモーセ一人を呼び寄せ、四十日四十夜、神ご自身がモーセに直接、十戒をはじめとした神の戒めを与えられました。この四十日間のモーセへの「律法授与」の出来事から、唯一の神を神として礼拝する、神の民が正式に誕生した、と言えます。この出来事と同様に、甦りの主イエス・キリストと使徒達の四十日間から、イエス・キリストの父なる御神とその民の新しい歴史の始まり、新しい神の民がここに誕生した、という見る事もできるでしょう。

しかし、出エジプト記と使徒言行録では異なる点が幾つもあります。最も大きな違いは、シナイ山頂で、神がモーセに与えられた律法は、「契約の書」として出エジプト記に記されています。一方、復活のキリスト・イエスが、四十日間、使徒達に語られたことは一言も記されていません。何故でしょうか？

この時点では使徒達が、主イエスの話を理解できていなかったからではないか、と私は思います。それは、6節の使徒達の主への問いかけから分かります。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」。現代でもそうですが、「国」と言えば自分達の民族が支配する国。使徒たちは、ここで次のように言っています。「神を知らぬ穢れた外国人の支配下で、長い間踏みにじられてきたイスラエルを、主よ、あなたが、ダビデ大王の頃のような神の王国に再建してくださるのは、今なのですか？」と尋ねています。使徒達は四十日の間、十字架の死より甦られた主イエス・キリストから神の国について教えられていましたが、彼らの「神の国」は、古い考えのままです。

しかし、それは致し方ないこと。聖霊なる御神がまだ降っておられないから、です。先週も語りましたが、何度でも語りましょう。聖霊なる御神の力がなければ、私達人間が聖書の神

のみ言葉を真実に理解することはできない、のです。神の言葉は、言わば天国からの言葉、創造者であり全知全能の方の言葉です、人間の叡智をいくら集めたとしても、理解できるものではありません。しかし、その一方、私達は、信仰生活に於いて、聖書の言葉や讚美歌、教会の祈りなどを通じて、自分の限界を突破する言葉、思いもしなかった新しい考え、想いが与えられることがあります。分からない筈の神の言葉が、具体的な問題で悩む私に、とても具体的に力をもって語りかけてくるのです。それは、聖霊なる御神が働いて、私達の心や耳を開いてくださっているからなのだと思います。だから使徒たちが、四十日間、聞き続けた筈の主イエスの言葉を真実に理解し始めたのは、御霊なる聖霊が降られた後、聖霊によるバプテスマを受けた後なのです。

3 聖霊による浸し

その聖霊によるバプテスマを主は次のように約束されます。「ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼(バプテスマ)を授けられるからである。」

洗礼者ヨハネは、神の民イスラエルが苦しい歴史の中、必死で待ち望んでいた約束のメシア、救い主がもうすぐやって来られる事を告げ、それまでに悔い改めない者は滅びる、と語り、人々に回心を迫りました。彼は、伝説のメシアがやって来て本格的に人々を裁き始める前に一人でも多く神の御許に連れ帰り救いたかった、彼の熱意に溢れる迫力ある説教と導きに迫られ回心へと導かれる者は多かったようです。人々は、洗礼者ヨハネから、ヨルダン川の流れに頭まで沈められ、罪を犯す古い自分に死んだことを示し、人生を新しく歩み始めました。それが洗礼者ヨハネの水でのバプテスマです。十字架と復活の主イエス・キリスト以前、旧約の信仰の頂点とされています。

そして、イエス・キリストの十字架と復活、救いの歴史における決定的な出来事が起こった今、今度は、聖霊なる御神が、新しいバプテスマをあなた方に授ける、と主は使徒達に約束されます。5節の「**聖霊によるバプテスマ**」を「**聖霊による浸し**」と訳した方がいます。バプテスマが、本来、水にどっぷりつかると、という意味のある単語なので、「浸し」と訳したのです。「聖霊による浸し」この訳はいいなあ、と思います。そして、「聖霊」と訳されている語には、「神の息」という意味もあります。天の御神の息吹が充満する中に全身を沈められ、御神の息を深く新たに吸い込んで、生まれ変わる、それが聖霊なる御神が私達人間に授けるバプテスマ。洗礼者ヨハネのバプテスマは、人々の決意や努力による回心であり、存在じたいが造りかえられるわけではありません。しかし、この聖霊の浸しによって生まれた新しい命は、御神の息を呼吸する命であり、天の御神にしか造り出せない命です。肉体の命を超えた永遠の命、神の子の命とも言えるのではないのでしょうか。それは、御子イエス・キリストの受肉、十字架と復活に続いて、人類史上今までになかった出来事です。まさに奇跡です。使徒達、私達一人一人が、神の起こした奇跡と言えます。

しかし、聖霊の浸しを受けたら、神の国について、神の真理について、何もかも一度に分

かるようになるか？というところではないのです。使徒言行録を読めば分かります。聖霊によるバプテスマ、聖霊なる御神の中にその身を浸す経験をして、ようやく使徒達は、スタート地点に立つ事ができた。そこから、具体的にイエス・キリストを宣べ伝えて行くプロセスの中で、彼らは主イエスが最後の四十日間で語られた神の国についての言葉を理解していきました。私達も同じです。満ち溢れる聖霊なる御神の内に沈められ、浸され、神の息吹を深呼吸する者と変えられ、祈りつつ、聖書や教会の歴史に学び、今現在、なすべきことを求め、祈りつつ実践していくのです。

4 開かれた神の国

さて、イエスが四十日間に使徒達に語られた神の国がどういうものであるか、それはイエスの7節から8節の言葉からうかがえます。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」この言葉は、これから始まる使徒言行録の予告です。実際、使徒言行録では、エルサレム、ユダヤ、サマリア、そして地の果て、つまり、ローマ帝国の領土まで、この順番に使徒達の宣教が広がって行く様子が描かれています。

ここで、ユダヤの次にサマリアの名前があげられるのは、旧約にはない点であり、神の国がどのようなものかをよく表しています。というのは、皆さんもご存じの通り、ユダヤとサマリアは激しく憎みあっていたからです。サマリアの人々の祖先は、外国人とイスラエル民族との混血。ユダヤの人々は、彼らを純粋なイスラエル人とみなさずに差別します。反発したサマリアの人々は、悉くイスラエルの妨害をし、遂には自分達の神殿をゲリジム山という山の上に建てて、モーセ五書を尊重する独自の「サマリア教」を確立します。主イエスや使徒達の時代、「サマリア人」とは「サマリア教徒」をさしていました。近親憎悪的な複雑な歴史が産む民族対立に信仰の対立まで加わり、ユダヤ人とサマリア人は、敵同士のように激しい憎しみあうようになっていました。そんな状況にありますから、復活の主イエス・キリストが、ユダヤ人である使徒達に向かって、「サマリアでも私の証人となれ」というのは、高く厚い壁を打ちくずす、本当にすごいことで、明らかに旧約の民の歴史を超え出ることでした。神の国、神のご支配が、キリスト・イエスを通じて、この地上に始まった！という善き知らせは、人間が造る民族や国境、そして宗教にも収まり切れるものではない、神の国は、全ての人を招く、広く大きく開かれた国、ユダヤ人も外国人もないのです。国籍も身分も性別も年齢も、宗教さえも関係ありません。主イエスは全ての人々の為に十字架に架かり、甦られされたからです。

5 小さな群れを愛する神

そして、この世の中の強者・勝者、いわゆる勝ち組が優先されない事も、「神の国」の大きな特徴ではないかと思えます。「小さな群れよ、恐れるな。父なる神はあなたがたに神の国をくださる」という主イエスのみ言葉の在り方は、旧約の民の歴史にも見られる神の在り方で

す。交読文と一緒に読んだ申命記という書物は、モーセの遺言とされていますが、そして先ほどの第7章には、いつ滅びてもいいような弱小民族イスラエルを、天の御神は「**宝の民**」とまで呼ばれた、と記されています。父なる御神が深く弱く小さい人々に御心を注いでおられることかがうかがえます。勿論、この事は、十字架と復活の主イエス・キリストにあって、更に徹底した形で現れてきます。ルカ福音書で過去四年間ご一緒に見て来た通りです。主イエスこそ、社会の大多数が忌み嫌い差別するような人々を受け入れ、友となって歩まれた方です。

このように、神は弱く小さい人々を格別に深く愛され、彼らが人間社会でも喜びをもって生きていけるように、とすぐ傍らで、スタンバイしておられます。しかし、当事者の弱く小さくされた人々がキリスト・イエスを受け入れなければ、聖霊なる御神の力は、その人に働く事はなさいません。父なる御神は、どんなに小さく弱い存在でも、決して操り人形のように支配しようとはなさらないのです。

さて、この度の新型コロナのパンデミック対策を見てみますと、台湾やニュージーランドなど小さく弱い国々が健闘しています。国の規模が小さいと、臨機応変で柔軟な対応がしやすいからでしょう。又、先進国がワクチンを占有してしまい、ワクチンを十分に打てない貧しい国々で変異株が発生しやすくなり世界に拡散する危険性を指摘する専門家もいます。自分達だけがよければ他はどうなっても構わない、という閉鎖的で自己中心的な在り方は、結局は、自分の身を亡ぼす、という警告のようです。弱者が幸せな世界は、全ての人をも幸せにする、という言葉はその通りだと思えます。まさにこれからの世界で私達が求めるべきものは、聖霊なる御神が聖書のみ言葉を通して私達に教えてくださる神の国であることを、時代が明らかにしています。

だがしかし、人間の罪の現実には厚く厳しいものです。それは、何より、神を知り神に生かされてある恵に生きている自分であるのに、その心の中に拭い去りがたくある自己中心的思い、愛の少なさを見ても分かります。罪の現実を侮ることはできません。人間の理想や理念だけでは、簡単に跳ね返されます。だからこそ、私達は、聖霊なる御神に全身を浸して、神の息を深く吸い込みながら、人の罪に打ち勝つ神の愛の支配に生きていく必要があります。そうして、イエス・キリストの証人として神の国に生きる喜びをまだ知らない人々に宣べ伝えて行くのです。聖霊なる御神の浸しによって生きる命を神は私達に既にお与えくださっているのですから。父なる神に、御子キリスト・イエスに、そして聖霊なる御神に感謝します。